



花の巻

巻

巻

先文
巻

遠 ¹³
1.312
2



本清

塚伊

伊塚

13
冊
巻

東海道

の

し
た
り

東海とうかいくくししままのの相あ見みかかををぬぬ人ひと
 情あはれねね矢や張ちやう似にありありままりりたた題あはれ
 向まう身みををりり味あじををりりししてて何なにのの事こと
 ううののああららのの神かみもも待まちたた道みちのの人ひと
 よよ及およぶぶ彼かの川がは柳やなぎのの木きはは折おるる
 餘あま篇へんのの長ながききのの事ことははすすたたくく成なるるのの

類向るうきゆうのな新あらた奇あざむ文章ぶんしょう付つ込こ入い稿こう

其その怨うらみのな秘ひのな智ちのな年とし片ぺ欠けのな真ま

砂すなのな書しよのなおおのな業ごうのな或ある集あつのな末すえ

小冊せうさくのな神かみ夜よ釋しやくのな並なら先ま常じょう切き捨すて

文章ぶんしょう一いつ年ねん夢むのな古ふるびびのな所ところをを洗せん濯じやく

ししくく日ひ也やでで足あし強かつがが異い國こく法ぽう口くち小せう細じよ

もももも作しよ者しやがが昔むかし年ねんのな其その國こく神かみのな物もの

故こ事と怪かい談だん見みのな其その也やもも

編へんのなああのなああのな

天保七申の

妹乃松相葉屋乃文

松亭の意下り題



お美流の鷹の擬え

魁勝の慶七
お美流

金沢無量寺の女鬼
お美流



お美流の鷹の擬え

お美流
鷹の擬え
お美流

中人物大津繪止見立

女髪結おんなかみむすあま



鬼おにの念佛ねがひをまもり

紙屋かみやや治兵衛ちべゑ

大杉舎

瓢箪ひょうたん鮎あや子こ撥はき



奴やつの行列ぎょうぎをまもり

畝山うしやまに強六ちやうろく

一隔ひとへりの
生なまむや神樂かみがらの

琴指南 巻二の二

後夜

の



漢翼 花遊 連理

志満 臺二編 卷之上

東都 松亭金水編次

第七回

思ふてふ云の葉の多秋夜経る色由かどぬのふ
ぞあつるとりあへ人の強うりしゆらふを春が方あて
あふかひひあひ一喜人の公かじりさるし人
のうらふを後夜茶の橋の中夜、自さるる
端さるる物ぞいさむるおふ一父の命にまゐて

心ざらぬもさびしう 瀬のあけて天間町紙屋ぐと御のお
小舟の浦のあや月のあて物のきこえ入るららびおま
そまよ御まてひらりまアアおまさんぐらひひるさるふま
宅のやうまゆおのくくモアあまこくらの遠ざかる今まを
おまきくくくお易イ娼妓と愛さるを居るのりあ
よめく小おさんがそんなおであらうとあおめゆめ
あんがが何れりあおもそまこく海のおもえ入るららび
うそ ままこ
おまきくくくお易イ娼妓と愛さるを居るのりあ
よめく小おさんがそんなおであらうとあおめゆめ
あんがが何れりあおもそまこく海のおもえ入るららび
うそ ままこ

どうぞしとておのりあおの世へ行くのりあが口と今日
中をくくくおのりあおの世へ行くのりあが口と今日
こまきくくくおのりあおの世へ行くのりあが口と今日
あまこくくくおのりあおの世へ行くのりあが口と今日
つたあまこくくおのりあおの世へ行くのりあが口と今日
くくくくくおのりあおの世へ行くのりあが口と今日
あまこくくくおのりあおの世へ行くのりあが口と今日
ちよつとあまこくくおのりあおの世へ行くのりあが口と今日

Handwritten notes in the top left margin, partially obscured.

Main handwritten text on the right page, written in a cursive script with frequent interlinear annotations.

Main handwritten text on the left page, continuing the cursive script with annotations.

Handwritten notes in the bottom left margin.



此ヨリ壹



詐ウソと信まことと小こ六ろく
於お春はると打う擲なるる毛も

此ヨリ壹

この本は二巻あり

か今六あいの筆ぎた 大かしてきでくち切のしんを和
一まえよ細らしくを念成さけるまうの成め者さんか
後どりーと此旁へんきまのいふまじりて
分らるのヨ男の件と秘のきとりつけまどは旁トヤ
こきむごよ忠の居るの成とましくをま 信ハ打
うり 勘さりそうしく 取らるる 秘指とあまを聴く
因果モウくふが 流りおひ切らうろあう一切をその始
ま初めてあめて世話よるりとまうらう後のけむが日まぐ

父が命成はるふいふふたんの情めんそまはかのみ
今さうらよ勘さうとも おまうともまうらうまひま
やう 強よ女ま一まよふ個の推まよあ人のみ初と平生
くくくくくく 爺さんがぢえさんくお細とひひりあ
推まよ控らまうとまうまき 世話無く危陰師 眞まふ
ごまろ 母まの善提と申ふまそまうや南まの師池松
とくとおのりむまうまうまうまうまうまうまうま
ま 爺まの耳ふりり 善因まのまらあつまらう

八十八の二

ぢやう ねんたつ とま ねみ しん あ
 糖よ多依の夢は寝真よ夢をかんしては何の事
いみ
 ともと志くく物ぞしめをきくぞと夢きくぞと
あや あや
 わがまにのまをらつとも目とも何らの夢のまよふと
しん あや
 夢寐ませうとらひらも群よ層風吹引のくまが
あ あ あ
 こまにふせん父の昔情ハ痛みのうへふ合被と依
あ あ あ
 群血志つるも我振り血よ流るるその体衆一丁目
あ あ あ
 えるより毛由 あ あ あ あ あ
あ あ あ あ あ
 ゆろく引むとはよらたのやどよう得てたれと得てたれと

て吟詠全 咽気寛くする病はよりやむ血も不由まじり
あ あ あ あ
 つた二眼とくさるるやうぞるまじ父が死骸のむまじり
あ あ あ あ
 わまりののちよ あ あ あ あ あ
 ぞみあまうとようらうと傍よ依して あ あ あ あ
あ あ あ あ あ
 能か入ら あ あ あ あ あ
あ あ あ あ あ
 兵衛 あ あ あ あ あ
あ あ あ あ あ
あ あ あ あ あ
 苦学はちもの 雜のよあ あ あ あ あ あ
あ あ あ あ あ

入らばい... 二...

こゝろ
二六三

とを^るあ^すひ^す連^く一^つ少^く一^つ由^り樂^しみ^たま^はせ^しま^しう^へと^もあ^りの^りみ^やり^を
 身^の心^を磨^き一^つも^もあ^まら^しう^へあ^りの^りも^もよ^うに^も世^をあ^まら^しう^へと^も
 る^もも^つつ^ひ可^く分^かち^んて^もよ^うに^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へ
 何^のの^りあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も

よ^ただ^ひら^り使^ひま^しと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 一^つ何^のの^りあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 一^つあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 一^つあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 一^つあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 一^つあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も

第八回

有^り初^めけ^しと^も比^しと^もや^り人^の心^を後^にあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も
 あ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^もあ^まら^しう^へと^も

ぎうしと故ごとく分ごとく父が傍りなつてまゝのせが容を
あつげな二封の手簡をまあげて圓とぬらひ形地
うたてていよいよ一封のあまごのき流よりこの
よちちとせし一封のあまごのき流とくたつて流すなり
おぼろものがるおのふかぬのき流とく一封押しての圓の
くのる服はぬらひぬらうしとよま下せ

おぼろのき流とく一封のあまごのき流とく一封押しての圓の
くのる服はぬらひぬらうしとよま下せ

おぼろのき流とく一封のあまごのき流とく一封押しての圓の
くのる服はぬらひぬらうしとよま下せ

おぼろのき流とく一封のあまごのき流とく一封押しての圓の
くのる服はぬらひぬらうしとよま下せ

親戚皆人よりましとせしむ心はせし親を
汚るべし操もしくあつらひ世を
隔るべし金力なき一身世は儚く
るしゆもあつたれば世方が置捨多ゆら
金くもなきが神もあつたれば
がましく借買の對面しし世方が生
涯成程しくし世もしく私存し
さうし世しく甲斐なき世は活生とて
いふ

種々の事秘教もあつたれば
ゆゑなき方へ苦勞をかける事
痛ましくし世は穢し神方淨
どくわもあつたれば世もあつたれば
あつたれば神もあつたれば
世の中遺棄の業もあつたれば
一生不変の人よあつたれば
たつたれば世もあつたれば
一回山と成ると

契^{ちぎ}り^あひ^あ 結^{むす}ぶ^あ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 皆^{みな} 守^{まも}り^あ 女^にの^の 名^な 守^{まも}り^あ 女^にの^の 名^な 守^{まも}り^あ 女^にの^の 名^な 守^{まも}り^あ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ

一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 傳^{つた}り^あ の^の 事^{こと} 大^{おほ} 事^{こと} 大^{おほ} 事^{こと} 大^{おほ} 事^{こと}
 用^{もち}い^あ 用^{もち}い^あ 用^{もち}い^あ 用^{もち}い^あ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ

一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ

一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ
 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ 一^{いち}つ^つ

とありけりまづいふも 儲えむのみまに再操をま
 巻紙も 潤よ ちやををぬぐー かくてあまのこは紙とを
 直一 かの小人の遺書と 短の系書の二つ 此の側
 手紙のうちよ ちやの 夜あけるがうも けり紙
 由も ちやをと ちやあづる ちやのちや 恩後うさ
 ちちあまゆり 侍のまゝも けりよのあわぬ物 連も
 身に ちやまぐと ちやまぐと ちや ちや ちや ちや ちや
 の 用公のちあふと ちや ちや ちや ちや ちや ちや

ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと
 の 破目より ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと
 ありけりまづいふも 儲えむのみまに再操をま
 巻紙も 潤よ ちやををぬぐー かくてあまのこは紙とを
 直一 かの小人の遺書と 短の系書の二つ 此の側
 手紙のうちよ ちやの 夜あけるがうも けり紙
 由も ちやをと ちやあづる ちやのちや 恩後うさ
 ちちあまゆり 侍のまゝも けりよのあわぬ物 連も
 身に ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと
 の 用公のちあふと ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと ちやまぐと

ひよへ 二二二

一〇



ぼんぼり下^よ同^としつ^{しつ}も^もおの^{おの}の^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 くら^{くら}す^すた^たい^いお^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 ぼんぼり^と
 四^し源^{げん}切^きよ^よあ^あや^やか^かと^とお^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 ま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 と^とあ^あま^ます^す一^いつ^つか^かあ^あま^まえ^えゆ^ゆト^トの^のひ^ひり^りて^てあ^あま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 こ^この^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 く^くあ^あま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 頂^た二^に目^めの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

と^とま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 の^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 も^もあ^あま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 お^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 どの^{どの}ま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 お^おの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 ま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 ね^ねえ^え
 折^せ断^{たん}成^{じやう}う^うけ^け等^{たう}む^むら^らが^が是^こ法^{ほつ}る^るれ^れど^ど今^{いま}も^もと^とま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

ひよくニハヒ

十一

命めい成なりちちぢぢ一いち無む情じやうのの情じやうををりりよよははるるとといいふふのの入い目め
もも多たくくししてて此こゝにに住すままるる西さいのの娘むすめのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけ
ああののちちににけけまましし小このの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
ががりりににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
のの多たくくししてて此こゝにに住すままるる西さいのの娘むすめのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけ
多たくくししてて此こゝにに住すままるる西さいのの娘むすめのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけ
難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
よよかかららののちちにに住すままるる西さいのの娘むすめのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけ

ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
一いち筋すぢもも持もちちせせ一いち果はたのの糸いとををととああんんがが来きりりににけけまましし
ととももどどううかかももああんんがが来きりりににけけまましし
ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし
ああののちちににけけままししのの難がたををののちちにに尋たずねねてて来きりりににけけまましし

八十八

七

らめく金廻へ申させしむりまの事ト情むおの孝
仍我まけ六洞のたてしるき家も無下にありぐく
幸とて子も力も賣しきくし一貸しき力のあを
不使みがるもおまが公よまうんめうう願塔さ身と
幸手でのゆもちく跡まの爺此のかれおきん
まも情らが死んで申く身ゆわかきしとあふらんと交
より彼家も其の秘教やの糸物とのめものよかけの
三年事の時ゆりゆき金十両成倍うけとまを
まこししむるがおまの收びうけとりてやを権は
のしむる送交りしむるが糸物も情ある
わく傳の仔細をまてかろうしあつとまひ七日ま
あつとありしととむひはるへ引籠りしむる
りのよおまのよろこびと申金の残り成りて
雨の時備さるみるをまてかろうし
まらひと申すて七日も申すて
ゆらほと申すて申すて

らめく金廻へ申させしむりまの事ト情むおの孝
仍我まけ六洞のたてしるき家も無下にありぐく
幸とて子も力も賣しきくし一貸しき力のあを
不使みがるもおまが公よまうんめうう願塔さ身と
幸手でのゆもちく跡まの爺此のかれおきん
まも情らが死んで申く身ゆわかきしとあふらんと交
より彼家も其の秘教やの糸物とのめものよかけの
三年事の時ゆりゆき金十両成倍うけとまを
まこししむるがおまの收びうけとりてやを権は
のしむる送交りしむるが糸物も情ある
わく傳の仔細をまてかろうしあつとまひ七日ま
あつとありしととむひはるへ引籠りしむる
りのよおまのよろこびと申金の残り成りて
雨の時備さるみるをまてかろうし
まらひと申すて七日も申すて
ゆらほと申すて申すて

ふらほと申すて

ふらほと申すて

神代河島

[Faint handwritten text in cursive style]

連理 花延志満基二編卷之中

東都 松亭金水編次

第九回

ある豊盛の送るる發結のお吉の獲のふまき
しそかまが父のき清を和しめ胸むやくと書
しそその目くまごの家より父より和す
独りある明こと
石と鏡



ちがやアひ大ひ手ひをひ結ひるひ後ひ人ひヨひ維ひぞひあひでひもひおひけひけひやひア
 一ひ後ひ人ひのひ大ひ口ひがひ大ひをひうひまひ深ひくひわひらひなひうひごひ下ひ對ひ面ひ由ひる
 きふ一人ひでひおひれひ込ひ中ひ大ひ成ひうひちひつひけひくひ隙ひ本ひよひうひ法ひ一
 おひぐひとひ極ひ一ひ消ひ差ひをひ大ひ極ひくひいひまひそひあひまひつひけひりひ持ひ
 出ひしひるひ酒ひ瓶ひとひ好ひ喝ひやひがひてひ茶ひ碗ひへひ法ひぐひ酒ひ瓶ひ自ひ身ひをひ
 由ひつひぞひ飲ひ手ひ一ひまひつひけひてひ二ひッひのひみひッひ酒ひ瓶ひのひかひぎひり
 五ひ法ひ酒ひよひうひ一ひてひ蒲ひ室ひ江ひかひりひ茶ひ後ひもひあひらひにひ飲ひ一
 一ひつひのひ女ひ子ひのひ面ひ為ひとひハひクひ人ひさひりひきひれひくひそひまひそひりひ七ひ八ひ

只ひ活ひ業ひあひもひおひぐひしひてひ好ひうひのひ茶ひをひ見ひ酒ひのひいひけひ次ひ
 身ひみひ人ひ我ひのひまひまひとひいひのひもひ強ひつひけひくひこひうひね
 らひでひ我ひ養ひをひ古ひよひ世ひ男ひ影ひ一ひやひ身ひのひうひ人ひをひまひ一ひまひるひがひ中ひ
 あひもひ公ひのひうひちひのひ役ひ全ひ少ひるひいひあひまひ父ひ子ひ合ひうひりひえ
 来ひをひうひるひのひ友ひ松ひ一ひこひるひがひ好ひとひ腹ひ裡ひ手ひ酒ひ瓶ひ
 してひ待ひどひもひ終ひくひ喜ひ儀ひるひ一ひをひやひ七ひ八ひ日ひ色ひけひまひハひか
 昔ひのひおひ成ひさひらひおひてひ甚ひ痛ひくひいひりひりひやひあひまひがひ裏ひのひ跡ひ
 次ひよひさひらひのひやひおひるひうひとひ後ひどひもひ来ひんひまひりひくひとひ是ひ

泥きんまじり口戸さく人ゆさるる容子にむ春
さく引紙さくめつと側る人よ向けきか如許
るりといわたりよりさくさくろぬ無鳩ふも身小志む志
り怖ろしくさくを家さくちかたりぬかき痛の若
性賢恥しあうまさを悔しよふ死んだめうとあされ
さくさくは身と怒るさくせぬうぬうちとを後世も
輝けき怒まきけがえよかると人とそまうぬ物のうち
使ようぬれれそあまきさく端のきもらあしく膝子

さくさくまじり口戸さく人ゆさるる容子にむ春
さく引紙さくめつと側る人よ向けきか如許
るりといわたりよりさくさくろぬ無鳩ふも身小志む志
り怖ろしくさくを家さくちかたりぬかき痛の若
性賢恥しあうまさを悔しよふ死んだめうとあされ
さくさくは身と怒るさくせぬうぬうちとを後世も
輝けき怒まきけがえよかると人とそまうぬ物のうち
使ようぬれれそあまきさく端のきもらあしく膝子

人

さまはそなたに
 あらう相好彩がしひ付く事かろう妙人まへ憐れみながら
 さく火成げんと登れくむをもてるまへ 強木一馬
 くこのやあきさんよりうさぎぢうちのむおりの物事か
 らふヨト紙入より百匹出してこころおきくはれあはる
 むのくきとてまよふぶいひますヨ 強木あつりえ
 昔アサくろくぼうむか今やうむとよひにまはさるト
 世くもまふが程もまく 船のきまはててくおきよ
 より竹のぼぐとまおくむけり来り 昔一相好火の幾り

まへまへ 今日の名簿ごとりのく何あもありま
 せんヨとまの所焼るまの彩のふげびきとくまのり
 まへまへ 強一あんど 昔一あてく焼るまの紙よあり
 めのサ 強一まのめいの附焼く 昔一ふて大敷屋をひこるま
 まへヨ 今よまのくまのまよふ井そのうま揚て居るんうま
 あと 些どかり 強一そのけやあがさ 強一あつりえ
 骨まへヨ 昔一あまへくせんおれ心もあてなるまのり
 そろえやせうと 強一あつりえ



酒真小糸どく嬢婦
奸夫膠漆の契と契す

五三



五三

か 房がゆ三 雑沓^{しやうせん}しや 後へせ^{あつ}ま^{あつ}ろ^{あつ}ー^{あつ}モウ^{あつ}山^{あつ}本^{あつ}お^{あつ}の^{あつ}の^{あつ}
らう^{あつ}せん^{あつ}あ^{あつ}う^{あつ}た^{あつ}格^{あつ}と^{あつ}ゆ^{あつ}あ^{あつ}さ^{あつ}甘^{あつ}く^{あつ}異^{あつ}ら^{あつ}ら^{あつ}う^{あつ}う^{あつ}の^{あつ}か
え^{あつ}その^{あつ}一^{あつ}件^{あつ}で^{あつ}お^{あつ}め^{あつ}る^{あつ}よ^{あつ}世^{あつ}を^{あつ}う^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}儲^{あつ}る^{あつ}金^{あつ}も^{あつ}あ^{あつ}け^{あつ}れ^{あつ}ど
そ^{あつ}ま^{あつ}が^{あつ}虫^{あつ}集^{あつ}後^{あつ}く^{あつ}う^{あつ}と^{あつ}ま^{あつ}て^{あつ}今^{あつ}け^{あつ}ー^{あつ}ま^{あつ}の^{あつ}り^{あつ}め^{あつ}入^{あつ}
い^{あつ}ま^{あつ}せ^{あつ}く^{あつ}で^{あつ}何^{あつ}も^{あつ}の^{あつ}ゆ^{あつ}ら^{あつ}け^{あつ}ら^{あつ}ら^{あつ}や^{あつ}ア^{あつ}可^{あつ}あ^{あつ}く^{あつ}後^{あつ}く^{あつ}
昔^{あつ}に^{あつ}お^{あつ}き^{あつ}ん^{あつ}え^{あつ}ん^{あつ}け^{あつ}ら^{あつ}け^{あつ}あ^{あつ}く^{あつ}の^{あつ}秋^{あつ}も^{あつ}う^{あつ}ら^{あつ}ま^{あつ}か^{あつ}ん
い^{あつ}の^{あつ}者^{あつ}も^{あつ}ど^{あつ}う^{あつ}ぞ^{あつ}ー^{あつ}と^{あつ}と^{あつ}あ^{あつ}ら^{あつ}て^{あつ}子^{あつ}ら^{あつ}子^{あつ}の^{あつ}鬼^{あつ}へ^{あつ}の^{あつ}て^{あつ}く^{あつ}
性^{あつ}手^{あつ}ん^{あつ}け^{あつ}せ^{あつ}ど^{あつ}爺^{あつ}え^{あつ}ん^{あつ}の^{あつ}石^{あつ}の^{あつ}金^{あつ}者^{あつ}と^{あつ}の^{あつ}入^{あつ}聖^{あつ}達^{あつ}ま^{あつ}り

あ^{あつ}人^{あつ}も^{あつ}年^{あつ}が^{あつ}ら^{あつ}う^{あつ}せ^{あつ}後^{あつ}は^{あつ}彩^{あつ}も^{あつ}あ^{あつ}ま^{あつ}り^{あつ}ま^{あつ}ん^{あつ}の^{あつ}サ^{あつ}ど^{あつ}う^{あつ}
ど^{あつ}思^{あつ}お^{あつ}マ^{あつ}ち^{あつ}の^{あつ}と^{あつ}幸^{あつ}抱^{あつ}ー^{あつ}と^{あつ}お^{あつ}ん^{あつ}あ^{あつ}ま^{あつ}ら^{あつ}ト^{あつ}一^{あつ}界^{あつ}
の^{あつ}づ^{あつ}ま^{あつ}よ^{あつ}ら^{あつ}い^{あつ}の^{あつ}の^{あつ}お^{あつ}ま^{あつ}の^{あつ}秋^{あつ}妓^{あつ}よ^{あつ}な^{あつ}の^{あつ}い^{あつ}との^{あつ}ゆ^{あつ}り^{あつ}
ひ^{あつ}ら^{あつ}う^{あつ}と^{あつ}ー^{あつ}と^{あつ}強^{あつ}ち^{あつ}よ^{あつ}お^{あつ}金^{あつ}ま^{あつ}の^{あつ}物^{あつ}で^{あつ}も^{あつ}る^{あつ}ー^{あつ}お^{あつ}格^{あつ}ー^{あつ}
時^{あつ}の^{あつ}云^{あつ}状^{あつ}る^{あつ}ー^{あつ}と^{あつ}表^{あつ}の^{あつ}平^{あつ}気^{あつ}お^{あつ}つ^{あつ}せ^{あつ}う^{あつ}け^{あつ}ら^{あつ}も^{あつ}お^{あつ}の^{あつ}内^{あつ}の^{あつ}
酒^{あつ}の^{あつ}酔^{あつ}き^{あつ}入^{あつ}け^{あつ}ら^{あつ}つ^{あつ}と^{あつ}確^{あつ}く^{あつ}ま^{あつ}ま^{あつ}く^{あつ}と^{あつ}針^{あつ}絞^{あつ}ら^{あつ}ら^{あつ}よ^{あつ}碑^{あつ}
と^{あつ}あり^{あつ}者^{あつ}ア^{あつ}レ^{あつ}サ^{あつ}且^{あつ}取^{あつ}る^{あつ}何^{あつ}年^{あつ}も^{あつ}お^{あつ}が^{あつ}羨^{あつ}か^{あつ}ら^{あつ}よ^{あつ}サ^{あつ}と^{あつ}
ん^{あつ}ま^{あつ}ゆ^{あつ}を^{あつ}お^{あつ}かり^{あつ}お^{あつ}ら^{あつ}ま^{あつ}ら^{あつ}む^{あつ}と^{あつ}一^{あつ}つ^{あつ}お^{あつ}わ^{あつ}ん^{あつ}る^{あつ}ま^{あつ}の^{あつ}

ハ
ハ
ハ

おびく痛く夜はうまうま

春
「さうらひなるおれをばいままよト恋のつとめありし
情の目ゆと泣くはも 群をよと道もくんぞのこしと
なや気由漫よりきたちとかなるあさくしとまじり
とかくさるるおれゆあけて 侍の考遠くささゆらん
酒さよゆりければおきいそあう 行かへ押のまじり
引ぬくみ布蒲束よ一 後二つちとく一 枕方に二枚
扇風の掃のびひちるれぬ縁のまよあともかきし推せと

「さうらひなるおれをばいままよト恋のつとめありし
情の目ゆと泣くはも 群をよと道もくんぞのこしと
なや気由漫よりきたちとかなるあさくしとまじり
とかくさるるおれゆあけて 侍の考遠くささゆらん
酒さよゆりければおきいそあう 行かへ押のまじり
引ぬくみ布蒲束よ一 後二つちとく一 枕方に二枚
扇風の掃のびひちるれぬ縁のまよあともかきし推せと

まで夢はくーおぢが方へをこびりてきり小困
あるれよりまゝまりの種ある金子をけりひま分の別
肩とありーぐ重役のものをこれとしーまびりまの羅よ
も新なりるべきと千鳥殿格別の仁義との山で遊教
せしきりけり強さの今さうふ方とあはるべき
もみければおぢが方に来りて金客とせりめうが
きりけり強さが強さの強さひひのさるま
ひもはるばる強さが強さの強さひひのさるま

遊教もひよとかひひのさるまの今か何方へ方とあは
よるべきに強さの強さひひのさるまの強さひひのさるま
他者曰近き曾の強さの強さひひのさるまの強さひひのさるま
遊女の強さの強さひひのさるまの強さひひのさるまの強さひひのさるま
遊女の強さの強さひひのさるまの強さひひのさるまの強さひひのさるま

ハよへニハカ

二二

人々多し泥まじりて利欲の爲よしとて教て
祈の情もあぬへその罪のと洗うん意
まが男子としく這般の婦人は薄さら
るむれと足もまじれば若く志望の
事

第十回

却説天間町なる紙屋あつた主人治三郎あるもの
そのわざより大病あつたらしく休けり終つたらしく
世にさういふ形のこころ佛事をも果しけりふ紙屋

継ぎて思ふまふありて親の縁者もち集まら
く解きまけりんも代小六も推しより麻よつと
めり高ひのきあゆもき一強ひりつたぬのみ似て
貞直あるのみるれば雷成長子と一うえんぬる
もちぎくお漬せんと解き一決しき一か小六
そのよきを踏つけりて始めの辞通みしけりてま
とのあふ解きかてやろ紙屋の重寶とついでま
由治三郎とわつてあつてまうり人推しつゝお方のゆ

八よりの二ノシロ

もの改めく 富業と出情 一を一と 家々まきく
紫陽 一と先代よ かくん 娘へく 幸一ける 活き清
も定まる 澤家もあしと 仲間の人 のさとしよ 任せ
屋にる 藤本とろの 操りりり お膳とる 娼妓
とあびての 七びけり ますこ 是天上の 別世界と 言ふ
る 娯楽の あらべーとも ありぬ 俸まのけ 折るあれ
あふまふ 相方も 別際よ つけく 惜くもの ありとあて
あり 今辰の 切し 紋もあふ とも せむさる ほど だけ 一と 活き
申とあしりて 互よ をかきうとと 初来り けり 契りしが
のさしう ころん ぢぢぢぢ のもちきく 活き清と ありとあて
山形 婦多川の 牛場と けり ぬ 被屋戸の 言とよ され
一四八と けり 雄士 ありしが お後と ともと けり ちぢぢぢ
と 親元へ けり けり せと せと 権る 合と 結納の 結とせ
て 清く けり 四八と けり けり 我の のと 一と ありと けり せと
理 難歌 ありと けり けり けり 第一 かんざり 借ての ありと けり
と ありと けり ありと けり ありと けり ありと けり ありと けり

入あへん

一

お様由今う後悔する一いつふ由して四八のふ成りから
 なることども由子分り方とをなれる破産戸由多
 くの容易あまふ成切がてと老や初とありのふり
 針らむ治き傷ふたふらむてはまぶがかの四八と六輝う
 りて情由多う合由ありてと治き傷よむひくえ
 それより後の四八が来ることありて由あるうぐん成りせと
 りて由ありて始りよなる余れよ四八を憤定手
 とまらうて中をせとまらけはわらひ紙屋のまら治き傷

といふ海く 別條二世までわらふの約束せしと笑く
 四八のく始りてふ由して進歩二人は愧成あて腹成
 悪んと一日子分の破産戸にみ人を結ふひて枝橋をんを
 彼方此方と雑細ま一若や紙治の来りてこのやと結身
 の人は目成らなるおらうとての事ある紙治き傷ハ少一の間
 とりて今日のお賤が方へ初んと枝橋へはなけけるふ
 よりてとらめ一気の男は人集かりて物成もらと成けり
 くと治き傷が例へ来ると見入がよまうとてと笑まあり

入るあふ二ハハロ

トロ



紙治



紙治

紙治の老急
技橋の辺子
救身
依宿の
古蹟

どけしおのりひのあまのこえん今夜辰巳へ入らき河と四流す
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ
とせむいぬのあのかつひる とせむいぬ とせむいぬ とせむいぬ

花迺志満基二編卷之中終

花外乃里ぬのつまこ

たろ云

まねなる

世の中

花の嶋臺

〇 けりまきをぬ
 中々
 〇 けりまきをぬ
 〇 けりまきをぬ

漢翼 花廻志満臺二編卷之下
 連理

東都 松亭金水編次

第十一回

夕ゆふ法ほぐく夜よおをつつああははををままししげげあありりのの女を小こ法ほららままくく
 治ちままききししめめいいああののいいがが醉まいいたたのの門かどへへいいままりりのの月つきもも美うららかかしくく
 ややどどいいたたをを焼やけけたた火かののああららままいい形かたち取とりりああららままいいたたららししてて
 ひひええああららままいいたたららししててああららままいいたたららししててああららままいいたたららししててああららままいいたたららししてて
 中ちゆうままううののここごごららののまままませんせん意いののちちをを人ひと目めももりりとと入いりりままうう晴はるるくく

見えどしせきおせくちまこうこ今こ夜こもこ泊こるこまこり
 船こがこあこるこのこでもこいこまこせこうこ 船 このこやこ何こよりこあこらこいこ
 ちこうこ泊こちこあこずこ船こ合こがこらこいこけこまこどこ 船 このこあこふこたこあこふこんこ
 さこんこのこ程こまこよこまこりこヨこあこ積こまこんこがこぐこまこ出こちこあこらこひこ
 あこいこ積こまこでこいこまこせこうこ何ことこあこらこあこらこいこまこあこらこいこ中こ
 るこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこはこ船こトこやこ
 逃こぐこもこ程こまこいこまこせこうこあこ積こまこよこあこのこまこせこうこトこあこらこいこまこせこうこ
 内こはこ二こ階こへこいこけこがこ積こまこのこ夜こ更こがこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ

まこいこわこくこまこげこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこのこあこらこいこまこせこうこ
 てこうこあこらこいこまこせこうこいこのこ船こでこはこ船こよこんこあこらこいこまこせこうこ
 ここうこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ
 あこらこいこまこせこうこいこまこせこうこ日こ外こ由こ夜こ更このこ藤こ本こ楼このこうこちこ
 船このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ
 ここうこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ
 ここうこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ
 ここうこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ
 ここうこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ
 ここうこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ
 ここうこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ 船 このこあこらこいこまこせこうこ



ありけいのしらすとあひまけん
 一そらうの私一やア何も
 人よまを秘送眼かうけらるる中トやア後由一何不
 かんまりる麻くし一何をもろ私の考げ下やアお
 ざらうとあひまをまたえ何一あ爺をゆめるとさう
 どのは何うかあひまけんけさどまは務めをこまひまを
 一ヤさんごるで存あぬ田を女あぶお滝さんご
 思むらうまや一はまあませんぜ一十二あまさんま私
 まかりあかひし都へはあがあまの事じいしあかん目

毛何処ぞ痛きでもあましく揉んであげませうト私
 とまろく揉みはまよさうけては流し流しが良か
 んらある服の洗いをえのりへん糊がうけおし度えのり
 色をけりけり流しを情れあむむ面ごうの薄きゆちむ
 ながらあるあま一さゆの落けるゆが結とまを
 治アアお滝さんまお揉みく痛くおんあせんとま
 か体移くそく何知ゆらけいせんとせの中と
 ののはまよまあまのい今夜このあせ流し

まがおもひが糸いとの狗いぬも迫せまりて頼たのむる病いもど
とくとくを角かくして夜よも明あければおまへの胡こ倫りんの支して
まま清せいとお滝たきよよとむるむる何なにののどどもも純じゆん一いつ見み小こ社しゃ
こことと羽は織おり一いつ紙かみよよつつてておおととああががおお滝たきののととはは結むすぶぶとと
治ぢまま清せいがが糸いとののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
へへおおかかりりるるままのの百ひゃく巻まきんんとと純じゆん一いつががすすままと
ささししぬぬのの怪けろろぬぬるるままとといいどどももささししぬぬかかく
治ぢまま清せいののととままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく

ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく
ままののちち来きりりととままのの若わかくくままふふれれももおお宿しゆく

第十二回

かかしてして後のち仁に田た里り屋やののまま人ひと鬼おに宿しゆく由よし縁ゆかりよりよりかかををけけととが

入いりりののまま人ひと鬼おに宿しゆく由よし縁ゆかりよりよりかかををけけととが

お滝のゆきとるりと紙張かたりて紙張紙ゆり合せらるる

あの鬼術もえより神の神なるもの影流の仕飽くと

人よ使者とてまゝとて言くとてまゝとて通客ゆてあ

つまればお滝がよめお公をの推しなぐるもあゝと

終めどもお個の舟日の終るまにますとく深きとらんと

ちりそとらましまると法共よ後の誓ひゆりひひ

まのまの流目の終るまゝ一日金糸が約せまりあ

ちりのけしーかくてまきりし甚もや秋張漆屋のまゝ

厚い黒いも珠も烈しけとて或日治ま清いなるまゝ

お滝ととのまひ枝橋より石根もあうちのまゝやと

大川へ漕かさせ今よひの夜もあつとまゝとて壺谷の

舟り 彼方此方とてまゝめづらつ酒とてかしてやら

舟で入けるまや船中まの酒もまのひちりしとて清く

あま〜さびがまより茶坊へあがりまゝ気かかき樂

まんと壺谷のむらゝあると橋とて酒樓へ舟をよせて

一と酒がしとする 戯きの一不舟成信ふせり
 そととあしと 仇愛のく一さ方のあはしきか入ト
 笑より下女の後我むさし 女少きさんとしていふまは
 夢くおんやくヨ先別ううか待子 なる一やくさう入死
 よまあひのまートひひらうう 袖と入るり入るるあ
 いかし船もあしとるおき紙屋の山さそとと入るより
 寒がる 狗とれ山もあしとるむ服よ情ぞとのふまは
 容体とるさ由物とれの色かより果てるその姿むひに
 あらるものさううも滝があひく 船政がさるまの面がせ
 るまが 船政あひむさしものいさぐ 山まのさううぬ対面
 子もあひくと路やさたおひく 死のま風よ谷の戸
 出さるの梅がえよなるさあひくすまこ 小女が例の仇
 中うとありととえゆるうう女公よ清まやあしとあひ
 顔 憎みとと沈めくあひよままさうー 一まのま
 よう入のあしとまート 後とさあまの 挨拶よあひ
 まあ ちあしあひまー 年のあひまのあひま

一と酒がしとする
 一と酒がしとする

一と酒がしとする

是一なるものもやと知す如もつらりた初て山まの澤
舟を痛むがぶらぐむぞえや 捨る力もわづむと
ども義理と人負成 憐れりくむるもひく味
の糸もむゆれまらゝるがく酒意致すあつりあを
らくありと治ま流のうら 洋を不程んとあえひく小妻
由路よりまわがうまへ 一旦おむつむやませう 一
そんあうあ後 素肉とあひのそやそらうら 一 剣ゆを
祿類子まあて 山まのあ致うけ 四五致えんふ人も

居ぞもてく一 瀬洞とあつらうまらく日死かたり 夢成
あのがのあまのそまうのあまて 血成も吐くあひひを
りま一 身の果教るさ 推量一 せこほよこそらつらひと
顔子あうらまの 治ま流が 袂成あうと 把り物成ゆ
いそげ 平仇く 個のかざり 流るるあが 流ま流の把て
突のけんうとあひのよけまどまへと 酒樓のあま
しく 強が人のあやかて けりひひく 初成 曝すもの
る 理るあまが あまのあまの 流まさんと 一 こそ 廿人が受

山まのあまの

一五



こちよ
小春 満楼 小園
艶郎 再會

小春

おんた

心まじりていかにいふに
不承あつては 娘の側
乃の心まじりていかにいふに
おのちの心まじりていかにいふに
生蓮の心まじりていかにいふに
刃に依りていかにいふに
心まじりていかにいふに

あつていかにいふに
心まじりていかにいふに
の心まじりていかにいふに
心まじりていかにいふに
心まじりていかにいふに
心まじりていかにいふに

無衛

小六

あまえらうりくがすやく
しむゆあるはらちとひよ
とろが身とわくのいん
ぞりま御もろりま
りくを 第一編の世
あまえらうりくがすやく
しむゆあるはらちとひよ
とろが身とわくのいん
ぞりま御もろりま
りくを 第一編の世

花の志満甚二編書之下終

